

## 有限会社 赤穂工務店

### 地域の木を もっと知って

八戸市三日町の交流施設エスタシオンで、三八・上北流域林業活性化センター主催による「げん木もりもり（森森）県産材フェア」が開催された（2007年2月）。県産材の良さや、地域の木材資源を利用することの大切さを市民に知ってもらおうと、「三八地域県産材で家を作る会」（田中裕会長）らの協力を得て開いたもので、八戸えんぶりの開催は大賑わいの盛況であった。本立てづくりに挑戦する「親子木工教室」や、炎がやわらかに燃え上がる「薪ストーブ・ペ



さまざまな方法がある「継ぎ手」。



赤穂社長が製作を担当したイベント用のスギの屋台。

レットストーブ展示」など、会場に設けられた11のブースのうちで特に関心を呼んだのは、日本建築の伝統技を紹介する「木組の匠実演」コーナー。「三八地域県産材で家を作る会」会の赤穂一夫副会長（赤穂工務店社長）が、住宅の土台など横架材の継ぎ手として用いられている「腰掛け蟻継ぎ」

や「金輪継ぎ」などについて説明した。見物客は、釘を使わずに柱と梁を接合させる「取り合い」部分の構造などの説明を受けながら、匠の技にあらためて認識を深めている様子だった。

スギやヒバの継ぎ手にまじってテーパーに置かれた、県産材と木肌が似ている白い木材は、スプルースの集成材。見た目は似ているものの、角材を野ざらしにして耐久性を調べたある実験では、わずか2年ほどで腐朽する結果が出ているが、それでもスプルース



継ぎ手について説明する赤穂社長。

の集成材は、県内で建築される住宅の8割の柱に使われている。この現実について赤穂氏は、「スプルースは湿気を吸いやすいために腐るのが早いのです。集成材でも同じ。それに比べて、青森スギはずっと耐久性が優れている。そのことを、もっともっと宣伝していかなければなりません」と話している。

また、赤穂氏は、「住宅建築ばかりをターゲットにして県産材の需要を拡大しようとしても、すぐに効果が得られる

ものではないと考えます。地域の農林水産部や、まちづくりのTMOなどと連携して、市民の意識に地域材が自然と浸透していくような働きかけが必要です。国産材は理屈ぬきに日本の住宅に合っている素材です。県内の住宅にも、合っているという点では県産材に勝るものではありません」と強調していた。

### 木材循環に熱意

県産材についてもっとよく知りたいので、おうかがいしたい。事務所に問い合わせの電話をかけてきた相手の人は、そう言った。

受話器を置くと、現場に出ている社長の携帯にさっそく連絡を入れた。建築現場で携帯電話を胸ポケットから取り出したのは、八戸市石手洗地区にある赤穂工務店の赤穂一夫社長だ。事務所から連絡を

入れたのは奥様である。

今年2月(2007年)、えんぶりの開催日に、八戸市三日町で三八・上北流域林業活性化センター主催による「県産材フェア」が開かれた。県産材のスギやアカマツ、クリなどの木材を展示した会場のコーナーで、木材のそれぞれの特性や、張り合わせた外材集成材との違いなどを熱心に説明していたのが、「三八地域県産材で家を作る会」副会長の赤穂一夫社長であった。

### 県産材にこだわる理由

「いやあ、ものすごい数のお客さんでしたよ。えんぶりに物に出かけた人たちが、県産材フェアの旗を見かけて会場に入ってきたんでしょうが、多くの人たちに実際に手で県産材に触れてもらっただけでも意義がありました。ああいふフェアをいろんな場所で開



樹齢200年以上のアカマツ。

催して、地域の山にはこんな木が育っているんだということをもっとPRしなくちゃ」

事務所に電話がかかってきたのは、フェア終了後の2月下旬のこと。会場で、請われて赤穂社長が名刺を差し出した人からだった。約束の日、事務所を訪ねてきたその人の関心事は、自然のままの無垢材と集成材との強度の違いについてであった。赤穂社長がこう振り返る。

「その方は無垢材で家を作る計画があるんですが、集成材のほうが強いと、どこかの住宅会社で聞いたらしいんです。それで心配になったんですね。実際には強度に大差はないのですが、強度のことよりも先に、私がどうして県産材にこだわった家づくりをしているのかから話しました」

赤穂社長は、3年前に南部町のあかね団地に赤穂工務店で家を新築したお客様の例を



あげた。そのお客様は、「三八地域県産材で家を建てる会」が年1回行っているバスツアーに2年続けて参加した。

このツアーは、県産材で建てた住宅を見学させるだけでなく、柱に使っているスギや、梁のアカマツが生えている山を見せることから始まる。よく手入れされたスギが整然と立ち並ぶ山の所有者は、同会長長の田中裕氏。赤穂社長が住宅に使うスギもアカマツもタリも、この田中氏の山から伐り出すのだ。

「お客様との話が決まると、ま

ず製材所に木材を注文します。注文を受けた製材所の従業員が、田中さんの山からスギやアカマツを伐り出して、4か月間ほど自然乾燥させてから製材します。その製材所も、うちの会の会員です」

赤穂社長がこだわるのは、県産材での家づくりによって循環する“連携”である。会員同士の“連携”もさることながら、住宅資金の一部が山に還元される連携によって進む森林整備。田中会長が整備しているからこそ、バスツアーで訪れた参加者たちに山のスギは整然と立ち並ぶ美しい姿を披露できるのだ。

### スギの伐採に感動の声

「ほとんどの山は荒れていまずよ。手入れされずに放置されています。雪の重さで枝が折れれば折れたまま、倒れれば倒れたまま。良いスギ材を

伐り出すためには、育つ山を整備しなくちゃ」

あかね団地に家を新築したお客様は、自分の家の柱に使うスギの伐採に立ち合った。40年も50年もかかって山で育った樹高20メートルを超えるスギの大樹が音を立てて倒れる様に、夫婦そろって感動の声をあげたという。

「50年かかって育ったものだからこそ丈夫なんですよ。逆に言うと、50年もの時間をかけて木を育てる仕事は林業なんです。昔は林業が生業として成り立っていた。近くの山の木で家を建てるのが当たり前だったし、その循環が環境を保全していたんです」

### 山の木が地域で循環

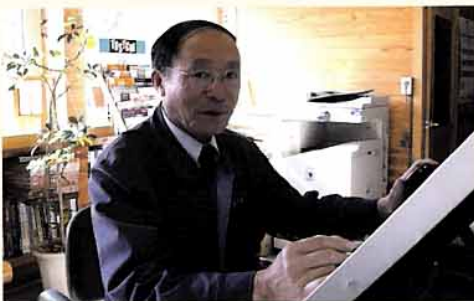
事務所を訪ねてきた人を、赤穂社長の奥様が、あかね団地の住宅まで車で案内した。新築計画が大きく前進した。

「お客様と工務店、それから製材所と山の所有者という“連携の輪”が大きくなれば、それだけ山の木は地域で循環することになります。この必要性を、お客様に伝えていきたい」

赤穂社長の家づくりに対する信念が、電話をかけてきた人にもしっかりと伝わったようである。

### 赤穂工務店

八戸市石手洗字油久保6の10  
電話 0178・96・5510



お客様と工務店、製材所、そして山の所有者の“連携の輪”が必要だと語る赤穂社長。